

服育ワークショップ 「世界に一つのオリジナル服作り - 切って貼って簡単！自分だけの服をデザインしよう！ -」 報告 Report

The Clothes Education Workshop: Design your own unique clothes with cloth pictures!

池田 仁美 武庫川女子大学 講師
坂田 彩美 武庫川女子大学 助手

Hitomi Ikeda Lecturer,
Mukogawa Women's University
Ayami Sakata Assistant,
Mukogawa Women's University

概要

第2回「武庫女スマイルフェス」は、武庫川女子大学主催、三井不動産株式会社協賛による合同イベントである。同社が運営する大型商業施設「三井ショッピングパークららぽーと甲子園」にて2020年2月15日・16日に開催された。ららぽーと甲子園の館内では、武庫川女子大学の学生15団体が子どもからシニアまでを対象としたイベントやワークショップを実施した。「武庫女スマイルフェス」は、2017年、三井不動産株式会社から“地域貢献の一環として本学の教育・研究活動に協力したい”と本学に打診があったことから始まった。本学の教育研究活動を地域社会に周知し、その成果の提供をする場となることを期待して、2018年に第1回「武庫女スマイルフェス」が9団体の参加により開催された。第1回の実施の好評を受け、第2回の実施が実現した。本稿では、「武庫女スマイルフェス」において、武庫川女子大学生生活環境学部生活環境学科の3年生が卒業基礎研究の一環として企画・運営した子ども向けの服育ワークショップの取り組みについて報告する。

1. はじめに

近年、衣服の役割や重要性について学ぶ服育の取り組みがなされている。服育は、株式会社チクマが提唱し、衣服を通して子ども達の豊かな心を育む取り組みで、環境、健康・安全、社会性、国際性をテーマに、衣服からの学びの可能性を広げることを目指している。環境問題へのアプローチや、制服の着こなしの重要性を見直すなど、衣服に対する気づきを導き出す活動がおこなわれており、子ども向けには、ワークシートやすごろくなどを活用し、理解を深める工夫もされている¹⁻³⁾。

本学生生活環境学科で3年後期に開講されている卒業基礎研究では、卒業研究の基礎となる知識、技術、研究対象へのアプローチの手法などを習得することを目標とする。被服造形学研究室(池田ゼミ)では、服育を卒業基礎研究のテーマとし、8名の学生⁴⁾が「武庫女スマイルフェス」での服育ワークショップの企画・実施を目指して検討を重ねてきた。

2. 服育をテーマとしたワークショップの企画

企画段階において、参加対象は、おしゃれへの興味関心を持ち始める小学校の低学年から中学年に設定し、衣服の主たる構成要素である布への興味・関心を高めることを服育の

学びの軸に置くことにした。視覚と触覚から布の素材、色、手触りの違いを感じる機会を提供し、なおかつ自分自身の好きな服を考え、貼り絵で表現するワークショップの実施を提案した。服育の効果を高めるべく、ワークショップでは、もの作りの楽しさやデザインの楽しさを体験するだけに留まらず、そこに衣服に関する気づきをいかに取り入れることができるかを検討した(図1)。

2-1 布貼り絵の作成方法の検討

企画段階で決定した「布貼り絵で服のデザイン画を作成する」というプログラムにおいて、その具体的な製作手順の検討をおこなった。まず、学生らは個々に考案した手順でサンプルを作成し、完成したサンプルを比較しながら、下絵となるボディや服の形状、布のサイズ、貼るための接着剤の種類、布を下絵に貼る順番、独自のアレンジが可能であるかを検証した(図2)。特に、作業の難易度が小学生に適合しているか、服育の効果が見込めるかについても重視した。また、最低限の準備物で実施できる工夫も意識した。学生らから出た意見は次の通りである。

- ・服を着た下絵の場合は、自分の好きな服をデザインすることができない。性別によって異なる好みにも対応できないか。
- ・性別を特定しないボディの下絵を用意し、服はボディと別に描いて後からボディに貼付けるようにすれば、男女関係なく好きなデザインができる。服を着る順番も考えられる。
- ・服の形は何種類かテンプレートにして用意しておけば、その輪郭をなぞることで簡単に服の形の線を描くことができる。
- ・布に服の形を型取ってから布を切る作業は低学年には難しいのではないかと。また、その方法ではデザイン画に1枚の布を貼るだけで終わってしまう。大きな布を大量に準備して参加者に選んで貰い、切るようなスペースは確保できるのか。
- ・布を最初から小さく刻んでおけば、ハサミが苦手な子どもはそのまま貼り付けることができる。
- ・様々な種類の布があれば、好きな色や素材を選んでもらうことができる。学内には授業の余り布が沢山あるので、捨てずに活用することはできないか。
- ・服の下絵の輪郭線の中にきれいに貼るのは難しいかもしれないが、下絵から布がはみ出した部分は、後から切り取れば、輪郭がきれいになる。

キーワード：服育、ワークショップ、布貼り絵、服のデザイン



図1 企画内容の打合せ



図2 布貼り絵のサンプル

2-2 布貼り絵の作成手順

学生らは、これらの意見を整理し、ワークショップに取り入れる服育の要素を次の5点とした。

- ①様々な種類の布を見て、触って比較し、違いを認識する。
- ②布をハサミで切る体験をする。
- ③上衣・下衣に適した衣服の形を把握する。
- ④デザイン画に布を貼り付け、布の素材感がわかる絵とする。
- ⑤衣服をコーディネートし、ボディに着せる順序を考える。

さらに、小学生以下の参加者に合わせた難易度でありながら、作品のオリジナリティを出すことができ、完成度を高められるよう、作成手順を次のとおりとした。

最初に上衣や下衣の服のテンプレートを複数用意しておく、参加者は、その中から使用するテンプレートを決定する。次に、別紙に服のテンプレートを置き、鉛筆で服の輪郭線を写し取る。布の小片を輪郭線の中にスティック糊で貼り付ける。布を貼り終えたら、服の輪郭線に沿って切り取る。元の線が見えにくい場合は、裏面にテンプレートで輪郭を写してから切り取る。服は重ねる順序や丈のバランスを考えながらボディに着せる（貼る）。最後に顔や靴、髪型を書き、色鉛筆で着色をして完成である。布の小片は、本学の被服製作系の実習室で保管していた余り布から、色柄、素材、手触りの異なる布を集め、1辺が約2〜3cmになるように切ったもので、そのまま貼ることも、更に細かく切ってから貼ることもできるようにした。なお、製作の所要時間は、30分から1時間である。

2-3 ボディと服のテンプレート

服のテンプレートの形状は10種類で、内訳は、長袖上衣、半袖上衣、スカート（丈の長短2種）、ズボン（丈の長短2種）、半袖ワンピース、オーバーオール、角襟、丸襟である。ボディのテンプレートは1種類とし、顔、髪型、靴は参加者が自由に描き込めるようにした。服のテンプレートは、ボディの大きさに合わせ、ボディの上に服を重ねると、ボディが見えないようになっている。また、上衣と下衣を重ねる順番についても、どちらが先になってもいいように、ウエストの横幅は同寸になるようにした。身頃のネックラインと襟のネックラインのカーブは同じラインにし、襟をつけるデザインにする場合はそのまま重ねられるようにした（図3）。ボディの等身は、参加者の年齢層になじみのあるアニメキャラクターを彷彿させる3頭身であるが、頭以外の胴体

部分は、子供の体型の特徴を反映した。

学生らは、参加者が作業の流れを把握しやすいように、手順を説明する写真入りの図を作成し（図4）、布貼り絵の完成見本を用意した。見本には、複数のアイテムの組み合わせ例を示したり、小さく切った布を組み合わせることでオリジナルのテキスタイルを作ったりできることを紹介したりし、参加者の年齢に合わせた作品作りの参考になるようにした（図5）。

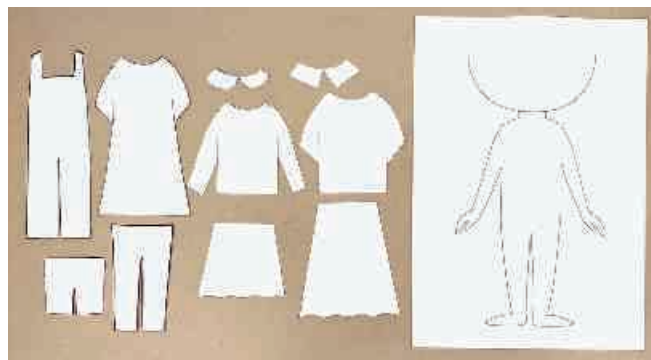


図3 服のテンプレートとボディ

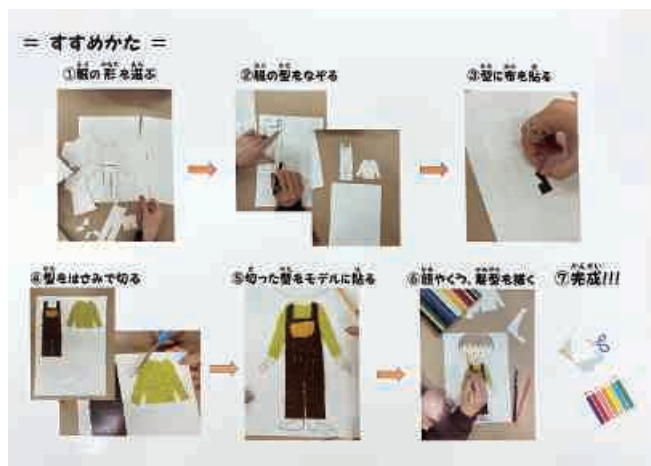


図4 布貼り絵の作成手順の説明図



図5 布貼り絵の完成見本

2-4 ワークショップのタイトル

ワークショップのタイトルは、参加者の参加意欲を引出し、期待感を持たせると共に、ある程度実施内容が想像できる文言であることが望ましい。学生らは、使用したいキーワードの候補を数点挙げてそれらを組み合わせ、広報用のメインタイトルを『世界に一つのオリジナル服作り』とした。サブタイトルは、どのように服を作るのかを示す文言を追記し、気軽に参加できるように簡単という文言を加え、『切って貼って簡単！自分だけの服をデザインしよう！』とした。

3. ワークショップの実施

3-1 実施要領

実施日は、2020年2月15日(土)と16日(日)で、会場は、ららぽーと甲子園2階のパークウォークコートである。実施時間は各日11:00~12:00, 13:00~14:00, 15:00~16:00の3回で、2日間で計6回のワークショップをおこなった。参加者の定員は各回10名、小学生以下を対象とし、各回の30分前から整理券を配布した。各回の開始から30分までは途中参加を受け付け、その時点で定員に達していない場合は小学生以上の参加も可とした。ワークショップでは工作用のハサミを使用するため、子どもだけでの使用が難しい場合は、保護者に付き添いのご協力をいただいた。

作業用テーブルには、70種類の布の小片をいれた箱を置き、そこから自由に布を選べるようにした。また、用意した布を全て台紙に貼り付けた布地見本を用意し、見本を元に布を探せるようにした(図6, 図7)。池田ゼミの3年生8名のうち2名は各回の受け付けを担当し、それ以外の6名がワークショップの指導を担当した。学生らは、参加者と普段着ている服や、好きな服などに関する話をしたり、布地の違いや特徴について説明をしたりしながら運営をし、筆者らは適宜サポートをおこなった(図8)。



図6 ワークショップのセッティング



図7 布地見本



図8 ワークショップの様子

3-2 参加者の内訳

2日間の参加者は53組で、未就学児30人、小学生30人、大人3人の63人であった(表1)。兄弟姉妹での参加は7組、親子での参加は2組だった。想定していたよりも低年齢の参加者が多かったが、保護者の協力や学生の補助により、作品を完成させることができた。男子の参加は女子よりも少なかった。

表1 ワークショップの参加者(2日間の合計)

	未就学児(30人)							小学生(30人)						大人	計
	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	不明	小1	小2	小3	小4	小5	小6		
男子			2	1	2	2		2	1	1	1	0	0		12
女子	1	2	2	11	3	2	2	6	5	6	4	3	1	3	51
計	1	2	4	12	5	4	2	8	6	7	5	3	1	3	63

3-3 参加者の様子と作品

未就学児は、布の入った箱に手を入れてその感触を楽しんだり、好きな色の布を見つけるのを楽しんだりしている様子であった。また、服や布地のイメージを貼り絵で表現するというよりも、色とりどりの布を貼ることに夢中になり、楽しんでる様子であった(図9)。

小学生になると、低学年においても布の種類と服のデザインの関係性に気付き、目指すスタイルに最適な布地を選択している様子が見受けられた。例を挙げると、透け感のある布を別の布の上から重ねて貼り付け、レイヤードスタイルのようにした作品(図10)や、複数の布を組み合わせて、オリジナルのテキスタイルを作り上げた作品がそれにあたる(図11)。またハート柄の布からハートだけ切り抜き、それをアップリケのように別の布に貼っていた作品もあった(図12)。小学生は、自分の作りたい服のイメージを明確に持ち、そのスタイルに適した布地とそうでない布地を意識して区別しているようであった。

全体としては、サテンやオーガンジーなど、表面に光沢がある布や、透ける素材の布など、目につきやすい布に人気集中していた。完成したデザイン画においても、カジュアルなスタイルから、ドレススタイルまで幅広い作品が揃った。

参加者らは、短時間ではあったが、布を選び、配置を考え、作品を完成させ、達成感を感じていた様子であった。同じテーブルの参加者同士で作品を見せ合い、自分にはないアイデアを共有し合う姿も見受けられた。参加者には作品を持ち帰っていただき、家庭でもワークショップの振り返りができるようにした。



図9 4歳女子の作品



図10 小3女子の作品



図11 小2男子の作品



図12 小1女子の作品

4. 学生の感想

ワークショップを実施した学生からは、次のような感想が述べられた。

「普段子ども達と話す機会がなかったので最初は不安だったが、たくさん子ども達と話せたのがよかった。布選びや、どんな服にするのかを一生懸命考える姿が印象的だった。」

「当日多くの子ども達に参加して貰え、時間をかけて話し合いながら準備を進めた甲斐があった。子ども独特の発想やデザインに驚かされ、自分自身にも良い影響を受けた。」

「ワークショップの作業の難易度が高いのではないかと心配していたが、参加者らは自身の年齢でできる範囲内で柔軟に対応していて驚いた。固定観念にしばられた大人にはできないような、自由な発想にあふれる作品はとてもおもしろかった。」

「保護者から、これまで紙を切ったり貼ったりという経験はあったが、布は初めてだということを知り、今回のワークショップが布に触れる良い機会になったことを実感した。」

「年齢によって、取り組み方や表現の仕方が異なっていたが、作品には子ども達一人一人の個性を見る事ができた。」

「自分が運営側になるのは初めてだったが、多くの子ども達に参加して貰えて嬉しかった。衣服への関心を持つきっかけになったのではと思う。」

「保護者も一緒に楽しんで貰えたのが良かった。小学生にも衣服の流行やこだわりがあることがわかった。」

「自分が小さいときにこのようなワークショップに参加してみたかった。子ども達と同じ目線を意識し、コミュニケーションをとりやすいように工夫をした。」

5. 今後のワークショップの課題と可能性

今回のワークショップの実践に関しては、服育を目的とした取り組みの実効性を探り、最適な対象年齢や適正な実施規模の確認をする意図もあった。今後の継続的な服育に関する取り組みの第一歩であったといえるが、実際に参加者に組みんでもらうことで、今後の課題も明らかになった。

作品のテーマは、今回は明確に提示をしなかったが、具体

的に「〇〇に着ていきたい服」というような着用シーンを設定すれば、子ども達のイメージが膨らみやすかったと思われる。さらに発展させるならば、完成したデザイン画をスキャナで取り込み、プロジェクターで投影して模擬的に着装させることで、装うという概念につなげていくことができたであろう。

用意した布の小片が学内の授業でできた余り布の有効活用であることについては、今回は参加者との対話の際に話題にあげる程度であった。もし、衣服におけるSDGsを主軸にした服育を目的とするならば、古着を集め、会場で古着から小片を切り取ったり、ボタンやファスナーなどの副資材を活用したりするような展開も想定される。

取り扱うテーマに応じて、自分の好きな服だけでなく、布素材やコーディネートによって季節感を表現してみたり、TPOに対応したスタイルを考案したりするのもよい。世界各国の民族衣装を題材にすれば、衣服文化の多様性への理解を深めることもできる。様々な切り口で服育の学びにつなげることができよう。

本稿では、ワークショップの実施報告に留め、作品の個々の分析は稿を改めるが、今後継続してワークショップを実施し、参加者の衣服への関心度と作品製作時に選択する布地の種類の関係や傾向を分析したり、年齢や性別による衣服への意識の違いを読み取ったりすることで、家庭科における被服教育の効果を実践的に調査したい。さらに、調査結果を元に、服育の取り組みを進めたい。

6. おわりに

今回のワークショップでは、参加者が布の素材、色、手触りの違いを感じ、衣服のデザインへの興味・関心を高める服育をおこなった。ワークショップを通じて参加者らに少なからず気づきを与えることができたという手応えがあった。学生らは、自分たちができる服育について考え、企画から実施まで一連のプロセスを経験し、大学での専門的な学びを社会に還元する方法を主体的に学び得ることができたといえる。今後も更なる内容の充実と発展を目指したい。

謝辞 ワorkshopの実施に際し、三井不動産株式会社、三井不動産商業マネジメント株式会社、本学の教育研究社会連携推進室社会連携推進課の皆様にご多大なご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。

注及び参考文献

- 1) 有吉直美: 生きる力を育てる「服育」ーこれまでの活動に見る服育の可能性ー, 繊維製品消費科学, 48, 1, 19-24, 2007
- 2) 有吉直美: 服育による気づきが広げる子どもたちの世界ー学校で、家庭で、服育に取り組むためにー, じっしょう家庭科資料 56, 実教出版, 13-18, 2016
- 3) ころを育む衣服 | 服育 net 研究所, <https://www.fukuiku.net/fukuiku.html> (2020.08.21)
- 4) 稲葉美月, 井上佳南, 岩村真優, 神先未久, 河本実佳, 田中栞, 谷口茉由

